

「色」を詠み込んだ秋の句に学ぶ(その2)

今瀬 一博

前回は、「白」「赤」「黒」を詠み込んだ、秋の作品を取り上げて色の効果について考えてみました。秋のイメージなども重なったり、そのイメージをより引き立てるという意味で、この三色は、秋の句に詠み込みやすかったのではないかと思います。

ところでこのことに加え、「白」「赤」「黒」に「青」を加えた四色は、「白」「青」等と形容詞にもなる上に、「白」「赤」「黒」に「青」を加えた四色は、尾語を付けて程度・状態を表す名詞にもなり、「白々(と)」「青(と)」のように、副詞として用いられることもあります。作句の際も、「白」「青」「白さ」「白々」と、様々な表現が可能です。このような背景があって、使う頻度も高くなったということは言えると思います。ただ多様な表現が可能だということは、使う言葉によって一句の雰囲気は微妙に変わりますので、よく考え詰んでみて、最も相応しいものを選ぶべきです。余談ですが、この四語の他に色を表す形容詞には、「黄色い」と「茶色い」がありますが、こちらは口語的で俳句に用いることはあまり多くないと思いますので、説明は省きます。

では、今回は「白」「赤」「黒」以外の色を詠み込んだ秋の句を取り上げます。先ず先程形容詞にもなる色として紹介した「青」、次いで、「紺」や「緑」を詠み込んだ作品を紹介します。

以前書いたことですが、「青」という名称は、その他多くの青系固有色の総称としての性格が強く、「青菜」のような「緑」と同義の用い方をする場合もあります。また実際の色の表現であるとともに、「青春」の「青」のような象徴的の用い方や、他の象徴性を持たせる使い方をすることのある言葉でした。

枝豆がしんから青い 瀬祭忌 阿部みどり女

「瀬祭忌」は正岡子規の忌日で、九月十九日。「枝豆」も秋の季語ですが、季節が強い忌日俳句では、当季の季語を加えて詠むこともあります。この句の色を表す言葉は形容詞の「青い」。文語の「青き」でなく口語を用いています。実際の色は「緑色」ですが、子規の短くも激しく真つ直ぐな一生を思えば、心の安らぎを感じる「緑」の使用より、形容詞の「青い」が相応しいでしょう。その意味で「青」は「象徴性」を帯びているとも言えます。乱雑さを想起させる「瀬祭忌」の使用は、うずたかい莢の中の枝豆の艶を思わせ「しんから青い」を際立たせるように思います。

翅青き虫きてまよふ夜学かな 木下 夕爾

「夜学」の実際をよく捉えている作品です。外は漆黒の闇でも全教室が灯るわけではなく、生徒のいる教室にだけ灯が入ります。その灯に引き寄せられて翅虫もたくさん集まります。電灯に照らされた秋夜の「翅青き虫」。その翅の形容である「青き」は、翅の薄さを伝え、どことはなく秋夜の虫の儚さが漂います。この虫の形容が、微妙なバランスの中で夜間の学びを続けている学生、そしてそれを受け入れる「夜学」の意義と響き合っています。

放屁虫青々と濡れるたりける 山口 青邨

この句の「青々と」は副詞です。「放屁虫」は、この場合はカ

メムシ科の昆虫で緑色をしたものを詠んだのでしよう。内容的には「放屁虫」のみを詠む一物仕立てですが、「青々と濡れるたりける」は何とも臭つてきそうな「青」の表現です。つややかなあの虫の色をこのように表現したのでしよう。一般的に、敬遠されたり気味悪がられる生き物は、その嫌悪感に徹して詠むのがむしろ効果的であることを、この句は教えてくれます。

続いて「紺」を詠み込んだ作品を紹介しますが、これ以降紹介する色は形容詞にはならず、色の呼称をそのまま名詞として用いますので明瞭で、句の印象も締まったものになります。

朝顔の紺のかなたの月日かな 石田 波郷

よく知られた波郷の代表的作品です。この句を色の効果に着目して鑑賞しますと、やはり「紺」は動きません。以前書いたとおり、「紺」は紫がかった濃い青を指し、藍色系統では最も深い色です。ですから朝顔の色は様々でも、「紺」の朝顔には空や海の紺と同じような深さがあり、最も単純で朝顔らしい美しさを見せてくれるように思います。蕪村が「朝がほや一輪深き淵のいろ」と詠んだとおりです。波郷句の眼目は「かなたの月日」への感慨ですが、「朝顔」は一日花ですので、この「月日」は「過ぎ去った月日」と考えるのが妥当でしょう。波郷の心を思いながらこの句を鑑賞するとき、「紺」の効果は大変大きいと言えます。

つきぬけて天上の紺曼珠沙華 山口 誓子

この誓子の句も「紺」の持つ、深さが生きています。大らかな対比の作品ですが、「秋空の紺の深さ」とその下の「真つ赤な曼珠沙華」の対比が見事です。「天上の紺」という措辞は、「紺」という色の深さを実感として読者に感じさせます。そして「紺」の深さと天上の深さゆえに「つきぬけて」が生まれます。茎の緑も鮮

やかに立つ曼珠沙華の美しさを的確に伝えるための表現です。ところで次の作品は曼珠沙華の「茎のみどり」を詠んだ句で、「不思議な」という措辞以上に不思議さが漂います。

曼珠沙華不思議は茎のみどりかな 長谷川双魚

「曼珠沙華」を詠んだ一物仕立ての作品です。「曼珠沙華」は、「彼岸花」や「死人花」等多くの呼び名を持ち、庭などにはあまり植えません。掲句はこの花を「茎のみどり」に着目して詠み、その色を「不思議」と言い切ります。この言葉自体に「曼珠沙華」の特異な存在の秘密が集約されているように思います。

秋は「白秋」と言いますが、一方で「錦秋」という言葉もあります。野山だけでなく庭園や家の庭にも花が咲き木々の葉は色づき、一年で最も華やかな季節です。今回「秋」の句を色に着目して鑑賞してみましたが、「秋」は季語にも色を含むものが多く、華やかな周囲の景に紛れぬように色を詠み込むことの難しさを感じました。また、色が一年で最も移ろう季節でもあるので、その点からも特定の色を詠み込むことの難しさを感じました。

最後に紹介する次の作品のように、秋の白さや絢爛さに負けないう句を詠むためには、周囲の秋の気配を全く消し去るほどの対象への入り込みや一体化が求められると思います。

桃冷す水しろがねにうごきけり 百合山羽公

桃を水に浮かばせて冷やしているのですが、桃の表面の繊毛によって、周りの水が「しろがね」色に動いているのを作者は見逃しません。桃の健康な色とそれを包む清らかな水が見えます。桃は冷蔵庫で冷やすより自然に近い冷水で冷やすことで、甘みが引き立ちます。羽公の句を読んで思ったのは、色が動かない作品というの、極めて精緻な写生句でもあるということでした。